２０２４／０５／２６　　礼拝メッセージ　　近藤崇志　牧師

主　　題：主権者なる主を賛美して
聖書箇所：詩篇４７篇

テーマ：私たちが賛美を捧げる主権者なる主は一体どのようなお方なのか？

今朝は、主権者なる主を賛美することについて、詩篇の４７篇のみことばから一緒に考えてみます。まずはいつものようにみことばをお読みしますので、神様のことばにひとりひとりよく耳を傾けてください。

詩篇４７篇　**指揮者のために。コラの子たちの賛歌**

「:1 すべての国々の民よ。手をたたけ。喜びの声をあげて神に叫べ。:2 まことに、いと高き方【主】は、恐れられる方。全地の大いなる王。:3 国々の民を私たちのもとに、国民を私たちの足もとに従わせる。:4 主は、私たちのためにお選びになる。私たちの受け継ぐ地を。主の愛するヤコブの誉れを。　セラ:5 神は喜びの叫びの中を、【主】は角笛の音の中を、上って行かれた。:6 神にほめ歌を歌え。ほめ歌を歌え。われらの王にほめ歌を歌え。ほめ歌を歌え。:7 まことに神は全地の王。巧みな歌でほめ歌を歌え。:8 神は国々を統べ治めておられる。神はその聖なる王座に着いておられる。:9 国々の民の尊き者たちは、アブラハムの神の民として集められた。:10 まことに、地の盾は神のもの。神は大いにあがめられる方。」

●ネブカデネザル王（cf. ダニエル書４章）

さて、実際の内容に入る前に、少し思い出してみてください。すばらしい信仰者であったあのダニエルが生きていた時代、地上で最も権力を握っていたのは、バビロンの王ネブカデネザルでした。彼にはほかに並ぶような競争相手などいなく、自分の好きなように、思いどおりにすべてを支配していました。命令を出せば、文字どおりそれだけで人々の首は飛び、彼の軍隊も最強で、ただ命令を下しさえすれば、地上のどんな国も望み通りに手にすることができました。彼の王国に住む民たちにとってネブカデネザル王は、まさに神として崇められるような圧倒的な力を持った存在だったのです。しかしそのすべてが一変する出来事が起こりました。ある日のこと、バビロンの宮殿の屋上を歩きながら、自分自身の王国の力、美しさ、広大さにおごり高ぶった彼は、こんなことばを発していたのです。よく聞いてください。ダニエル４：３０－３２「**:30 王はこう言っていた。「この大バビロンは、私の権力によって、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が建てたものではないか。」**」と。すると、その瞬間、まだそのことばが彼の口にあるうちに、主が天から語られました。このように告げられたのです。「**:31 …「ネブカデネザル王。あなたに告げる。国はあなたから取り去られた。:32 あなたは人間の中から追い出され、野の獣とともに住み、牛のように草を食べ、こうして七つの時があなたの上を過ぎ、ついに、あなたは、いと高き方が人間の国を支配し、その国をみこころにかなう者にお与えになることを知るようになる。**」と。主のことばは彼の上にすぐに成就し、彼はすべてのものを失うことになったのです。

皆さんは、このストーリー自体はこれまでにもう何度も耳にしたことがあるでしょう。でも立ち止まっていま一度考えてみてください。いったいネブカデネザル王の何が問題だったのしょう？どこに大きな問題を抱えていたのでしょう？ネブカデネザル王の問題、それは、彼が自分自身がだれで、主がだれなのかを忘れてしまったことにありました。彼は、自分の権力や富は自分自身で手にしたと考えました。築いた自分の地位や力はだれにも揺るがされることのないものだと思い込みました。人の目から見れば、確かに彼に並ぶような王は周りにはいなかったでしょう。地上で最も強力な国を築いた王だと見えたかもしれません。しかし神様の目から見れば、それらは何でもありませんでした。この世のすべてを支配しておられるその方の前には、彼など取るにも足らないほんの小さな存在にしか過ぎなかったのです。こうして、この世界の本当の王を忘れて高慢になった者は、見事に主によって砕かれました。主

権者なる主の前にとるべきふさわしい態度を示さなかった人物は、主から厳しいレッスンを受けることとなったのです。

さて、少し考えてみましょう。今の私たちはどうでしょう？果たして私たち自身は、主の偉大さを正しく見ているでしょうか？主の偉大さを素直に認めて、この主の前にふさわしい賛美や恐れを表しているでしょうか？もちろん当時のネブカデネザル王のように、多くの富や財産、圧倒的な権力などというものを私たちは持っていないでしょう。それでも、時にすべてが順調に思えるようなことがあれば、それを自分の手柄のように考えていたりしないでしょうか？いろいろなものが与えられているようなとき、自分の知恵や力によってそれを手にしたかのように思い込んだりしないでしょうか？果たして私たちはどんなときも、自分自身がいったい何者で、そして、主がだれなのかということを正しく覚えているでしょうか？

きょう私たちが見るこの詩篇４７篇のみことばは、主が世界のすべてを支配しておられる主権者であること、また、その主に対して私たちがどのように応答するべきなのか、大きく二つの応答をはっきりと教えてくれます。一つ目の応答が１－４節までに見て取ることができ、二つ目の応答が５－１０節に見て取ることができます。ですから皆さん、改めてぜひ自分自身のこととして考えてみてください。果たして私たちは、神様がそもそもいったいだれなのかということを本当に正しく覚えているのかどうか、そして、その神様の前に喜ばれる態度を、その神様の前にふさわしく示すべきその態度を今とっているのかどうかを、一緒に考えてみましょう。

〇主権者なる主：私たちにふさわしい二つの応答

１．心からの喜びを表すこと　１－４節

一つ目の応答が１－４節に記されていました。一つ目の応答、それは「心からの喜びを表すこと」です。もう一度１節をよく見ると、このように始まっていました。「:1 **すべての国々の民よ。手をたたけ。喜びの声をあげて神に叫べ。**」と。ここで詩篇の著者は、一部の人にではなく、すべての人たちに対して呼びかけていました。「**手をたたけ**」と。「**喜びの声をあげて神に叫べ。**」と。

▶**「手をたたけ」**

まず、はじめに用いられていた「**手をたたけ**」ということばは、文字どおり「手をたたくこと」「拍手すること」を表しています。皆さんはどんなときに拍手をしますか？私たちも、喜ぶ時や嬉しさや感謝を表すのに拍手すること、手をたたくことがあるでしょう。聖書の中でも同じです。この「**手をたた**」くという行為は、大きな喜びや感謝、嬉しさなどを表す表現として用いられていました。例えば、Ⅱ列王記の中にもこんな場面が描かれています。Ⅱ列王記１１：１２、場面を想像しながら読んでくださいね。「**こうしてエホヤダは、王の子を連れ出し、彼に王冠をかぶらせ、さとしの書を渡した。彼らは彼を王と宣言した。そして、彼に油をそそぎ、手をたたいて、「王さま。ばんざい」と叫んだ。**」と。想像できました？王様の誕生を目の当たりにした者たちの姿は、どんな姿だと思います？間違いなくその場は静けさのかけらもなかったでしょう。嬉しさや感動に満ちていたでしょう。熱狂的な喜びを覚えた人たちによって「**手をたたいて**」、そして大きな声で「**ばんざい**」と、そういった叫びが響き渡っていたでしょう。手をたたくことによって大きな喜びを表すのです。そしてこれと同じように詩篇の著者は言っていました。「すべての者たちよ。神様に向かって手をたたけ。」と。

▶**「叫べ」**

また、次に用いられていた「**叫べ**」ということばには、もともと「大声をあげる」とか「嬉しくて叫ぶ」といった意味が含まれています。また特にこのことばは、「戦いに勝利した人たちがあげる喜びの叫びや歓声」を表しました。これもちょっと想像してみてくださいね。例えば、ダビデとゴリアテとの戦いで、ゴリアテを前にしたイスラエルの兵士たちはどんな様子でした？最初は完全に意気消沈して、非常に大きな恐れを抱いていました。しかし、そんなゴリアテをダビデが打ち負かしたときの様子がⅠ

サムエル１７：５０、５２にこう書いています。「:50 **こうしてダビデは、石投げと一つの石で、このペリシテ人に勝った。ダビデの手には、一振りの剣もなかったが、このペリシテ人を打ち殺してしまった。**」「:52 **イスラエルとユダの人々は立ち上がり、ときの声をあげて、ペリシテ人をガテに至るまで、エクロンの門まで追った…。**」ここで「**ときの声をあげて**」と訳されていたことばが、「**叫べ**」と同じものになるのですが、どうです？イスラエルの兵士たちがどんなに大きな歓声をあげていたか、容易に思い浮かべられません？自分たちにはもう絶対に手に負えないと敗北を覚悟していた時、ダビデを用いて神様が敵を打ち倒されたのです。大変な状態にあった者たちが、助け出されたのです。深い安堵や嬉しさ、また力がうちから湧き出ていたことでしょう。兵士たちは抑え切れない喜びや安心感や感謝や勇気、そういったものをもって大きな叫び声をあげながら戦いへと出て行ったのです。間違いなくその叫びは小さな声ではありません。大きな喜びにあふれたものでした。

そしてこれと同じように、詩篇の著者は言うのです。「すべての者たちよ。神様に向かって喜びの声をあげて叫べ。」と。 ここでみことばが求めていたことは明白です。私たちの心からの喜びを表すことでした。ただ何となくしぶしぶするものではありません。本当はしたくないけれど仕方なくするのでもなければ、別のいろいろなものに心が捕らわれていて、片手間にするものでもありません。神様を前にした私たちが、その神様に心を留めて、その神様を礼拝することが何よりも楽しみだからこそ、何よりも喜びだからこそ、そのあふれんばかりの喜びを心から表そうとするのです。ことばだけではなくて、身振りをもって神様に向かって感謝や賛美をささげようとするわけです。それが１節に書かれていた場面でした。喜びを心から表そうと。

でも、ここまで私たちが喜びを表すべきその神様という存在は、いったいどんな存在なのでしょう？ここまでしてなぜ詩篇の著者は、すべての民に向かって、感謝の叫びをささげよ、と命じていたのでしょう？もちろんその理由として、このあと著者は、喜びをささげるその神様がいったいどのようなお方なのか、神様の姿を少なくとも二つ描いています。続きの２－３節にこう書いていました。「:2 **まことに、いと高き方【主】は、恐れられる方。全地の大いなる王。**:3 **国々の民を私たちのもとに、国民を私たちの足もとに従わせる。**」と。

●心からの喜びを表す神様の姿：

１）神様はすべてを支配しておられる王　２－３節

一つ目に描かれていた姿、それは、「すべてを支配しておられる王」でした。文字どおり神様がすべてのものの上におられる大いなる王であるからこそ、私たちはこの方の前にへりくだり、この方の前に心からの喜びをささげようとするのです。立ち止まって少し考えてみましょう。著者は神様の姿を表すのに、ここでいろんなことばを用いていました。特に、初めにこんなことばがありましたね。「**まことに、いと高き方【主】は、**」と。私たちはいろんなところで「**いと高き方**」ということ聞くことがありますが、これはいったいどういう意味でしょう？

▸「いと高き」

ここで使われている「**いと高き方**」ということばには、「最も高い」とか「最上級」という意味が含まれています。そして特に神様に対して用いられれば、「神様が持っておられる圧倒的な威厳」であったり、「神様がほかのものとは一線を画しいていて、ほかのものと比べて最も優れたお方である」ということを表していました。実際にみことばを見るとわかり易いかと思いますが、詩篇９１篇にもこんなふうに書いています。９１：１「**いと高き方の隠れ場に住む者は、全能者の陰に宿る。**」と。また７－９節にも「:7 **千人が、あなたのかたわらに、万人が、あなたの右手に倒れても、それはあなたには、近づかない。**:8 **あなたはただ、それを目にし、悪者への報いを見るだけである。**:9 **それはあなたが私の避け所である【主】を、いと高き方を、あなたの住まいとしたからである。**」そしてもう少し進んで ９７：９を見るとこう書いています。「**まことに【主】よ。あなたは全地の上に、すぐれて高い方。すべての神々をはるかに抜いて、高きに**

おられます。」と。例えば家で小さな子どもに触らせたくないものがある場合、親はそれを手の届かない高いところに置くことがあります。そうすると、その子どもはどんなに手を伸ばしたとしても、絶対にそれに触ることはできません。高いところに置かれると届きません。私たちの神様はほかのものと比較して、少しだけ高いお方ではありません。この方はほかのものと比べるとことなど絶対にできない、最も高いお方でした。手を伸ばしても届く者などだれもいません。どんなに力や知恵のある者でも、あふれた地上の強い者でさえ、それに及ぶことは決してありません。さらに言うなら、最もすぐれているその権威や地位というものが神様だけのものであるからこそ、神様だけがすべてにまさって偉大なお方であるからこそ、最高の王であるからこそ、その地位を求めようとするもの…だれだか覚えています？サタンは、その地位を求めたからこそ、さばかれたのです。イザヤ１４：１２－１５にこう書いています。「**:12 暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。:13 あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。:14 密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』:15 しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。**」想像できます？いと高き方は一番上におられるのです。そこにどれだけ手を伸ばしても届くことがなければ、そこに手を伸ばす者は、落とされるのです。ほかに並ぶ者はひとりとしていません。神様こそいと高きお方。すべてにまさっておられるお方であり、ご自分の思いのままにすべてを成すことのできる権威を持っておられるお方だということです。すべてのものがその下にありました。すべてのものがこの権威の下にありました。だからこそ、私たちはこれほど高い方を覚えるときに、心からの喜びを表そうとするのです。

▶**【主】**

　またこれに加えて著者はここで、単に「**いと高き方**」とは言わず、「**いと高き方【主】**」と言われていました。皆さんならすぐに気づいたかと思いますが、この主は太文字になっています。太文字になっているということは、これには“ヤハウェ”という神様の個人的な名前が使われていました。もちろんいろんな意味が含まれていますが、この“ヤハウェ”という名、それは、私たちに、このお方が自分以外の何ものにも頼る必要のない、すべての力を御自身のうちに持っておられる“自存の神様”であることを教えてくれていました。神様はほかのものに頼る必要など何もありません。だから思い出してみてください。神様がこの世界のすべてを創造された時、神様はほかの何かの助けを求める必要はいっさいありませんでした。何か別の力や知恵に頼る必要もなければ、造るための物質や物をだれかから借りてくる必要もありませんでした。神様はただ、ことばを話されました。「光があれ。」（創世記１：３）すると光ができました。「**天の下の水は一所に集まれ。かわいた所が現れよ。**」（創世記１：９）するとそのようになりました。「地が種類に従って生き物を生ぜよ。」（創世記１：２４）するとそのようになりました。すべてをご自分のうちに持っておられるその神様には、ほかに必要とするものはありませんでした。ただご自身の知恵だけで十分。すべてのことをただご自身のみで成し遂げることのできる圧倒的な力と権威を、いやそもそも力そのものであるお方、それこそが“ヤハウェ”なる神様だったのです。そして皆さん、私たちが忘れてはいけないのは、私たちが今礼拝している神様は、この神様だ、ということです。私たちはこの神様によって造られました。生まれながらに私たちは神様を頼りとする者です。でも、このいと高き方はだれの力も必要としません。すべての主権者、王として君臨されているお方だということです。別のみことばもはっきりとこの主の姿を描いていました。詩篇３３：６－１１にこのように書いています。「**:6 【主】のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって。:7 主は海の水をせきのように集め、深い水を倉に収められる。:8 全地よ。【主】を恐れよ。世界に住む者よ。みな、主の前におののけ。:9 まことに、主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは堅く立つ。:10 【主】は国々のはかりごとを無効にし、国々の民の計画をむなしくされる。:11 【主】のはかりごとはとこしえに立ち、御心の計画は代々に至る。**」と。またイザヤ４６：９－１０にもこう書いていま

す。「**:9 遠い大昔の事を思い出せ。わたしが神である。ほかにはいない。わたしのような神はいない。:10 わたしは、終わりの事を初めから告げ、まだなされていない事を昔から告げ、『わたしのはかりごとは成就し、わたしの望む事をすべて成し遂げる』と言う。**」終わりの事を初めから告げ、なされていない事を昔から告げることのできるようなお方は、この方以外にはおられません。すべてのことは確かにこの主権者なる神様の御手のうちで起こっています。すべてのものをご自分の力だけで創造されたそのお方は、今も変わらずにご自身の力だけでそのすべてを支配し続けておられます。昔も今もこの先に起こることも、そのすべてを神様はご存じです。神様にとってサプライズはひとつもありません。それは、この方こそが、すべてのうちに働いておられるからです。すべてのことが神様によって始められ、すべてのことが神様によって終わらされます。この方のご計画を妨げることのできる人もいなければ、国もありません。すべてにまさる全知の王はすべてを支配しておられ、ご自分の望むことを、ご自分の望むタイミングで、ご自分のみこころを必ず成し遂げられるわけです。

もちろん私たちには、その神様のご計画が全く理解できないことがあります。神様を愛する者の歩みのうちにも、困難や混乱というものが生じることもあります。でもそれは、決して神様の御手から外れて起こっているのではありません。同じ神様がこんな約束を与えていました。ローマ８：２８にこう書いていました。「**神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。**」すばらしい慰めだと思いません？神様を愛する者のうちに起こることは、一部だけではありません。そのすべてにおいて神様が働いて私たちの益とされると約束されていたのです。もしこの神様がご自身以外の何かを頼りとして、何かを成し遂げるためにほかの何かに助けを求めるような、そんな力のない神様であれば、私たちはこのような約束を見ても不安を抱くかもしれません。でも、私たちの神様がご自身ですべてのことを成し遂げられるお方であるなら、すべてのことを益としてくださり、すべてのことに栄光を現されるお方であるなら、私たちはこの神様のうちに信頼し、慰めを見出すことができるということです。神様があまりにも偉大なお方であるからこそ、私たちはその御手のうちに平安を見出すことができるということです。かつてスポルジョンもこんなことばを残していました。神の主権に関してこう言っています。「神の主権は、神の子が夜に頭を休める枕であり、完全な平安を与えてくれるものです。」と。（チャールズ・スポルジョン）神様がすべてのことを知って、神様がすべてのものを支配してくださっていると私たちが知っているなら、私たちは夜恐れることはないと。ほかに並ぶものなどいません。神様こそすべてにまさるいと高きお方、力ある自存の主、すべてをご自分の栄光のために成し遂げられるお方、だからこそです。私たちはこの神様を覚えるときに、この神様の前に私たちは正しく恐れ、心からの喜びを表そうとするのです。それこそがふさわしい応答でした。でも著者が描いていた神様の姿はこれだけではありませんでした。

２）神様は愛のゆえに祝福を与えられる王　４節

加えてもう一つの姿が、続く４節に記されています。４７：４「**主は、私たちのためにお選びになる。私たちの受け継ぐ地を。主の愛するヤコブの誉れを。**」と。二つ目の姿、それは、「愛のゆえに祝福を与えられる王」です。今読んだ４節の中で、「主が、私たちのために受け継ぐ地をお選びになる」といった表現がありましたが、これは、神様が約束の地－カナンをご自分の民であるイスラエルにお与えになられたことを意味していました。覚えておられると思いますが、一番初め、神様ご自身がアブラハムに対して約束を与えておられました。カナンの地に入ったところ、そこで彼に向かってこのように述べておられたのです。創世記１２：７節に書いています。「**そのころ、【主】がアブラムに現れ、そして「あなたの子孫に、わたしはこの地を与える」と仰せられた。**」と。そのことばのとおりに、主は民とともに敵と戦い、勝利をもたらし、そしてご自分が選んだその土地を祝福としてイスラエルに与え続けておられました。神様は確かに結んだ約束を忠実に守られ続けているお方だったのです。

でも、不思議に思ったことはありません？どうして神様はこんなにもイスラエルの民たちを祝されたのでしょう？私たちもよく知っているように、彼らはいつも主に対して忠実であったわけではありません。主のみわざを忘れてしまって、不平不満を平気で口にすることもありました。私たちと同じようにかたくなに主に逆らって、深刻な罪を犯すことさえ何度もありました。彼らは繰り返し繰り返し主をひどく悲しませるような、弱く愚かで罪深い存在だったのです。いったいどうしてこのような者たちを神様は変わらずに祝されていたのでしょう？

その答えはシンプルであって、また驚くべきものでした。その答えは、神様がただ彼らを愛されたからでした。４節の中にも書いていましたね。こんな表現が出ています。「**主の愛する**」と。主は愛していました。主が民を愛されていたのは、何も彼らのうちに愛するのにふさわしい何か資格や資質があったからではありません。皆さん、主の愛の基盤というのは、主ご自身のうちにありました。主の愛というのは、変わることのない愛そのものであられる主ご自身の性質に基づくものでした。ほかのものに拠り頼んだのではありません。神様はご自身の性質によって愛を示されたのです。改めてこれはすごいことだと思いません？なぜなら、もし神様の愛が私たちのうちの何かとか、ほかの何かに基づくものだったとすれば、私たちに値したのは愛ではなくて、罪深さゆえの罪の罰しかあり得ませんでした。私たちが自分たちにふさわしい報いをただ受けたのなら、私たちにはただ罪に燃え上がる聖なる神の怒りしか値しませんでした。救いではなくて、永遠のさばきしか値しなかったのです。でも神様の愛は、私たちに基づくものではなく、神様に基づくものでした。すべてのことをご自身の力のみで成し遂げることのできる、その力ある神様ご自身のご性質、その愛に基づくからこそ、私たちは、私たちのうちではなく、その神様の愛と恵みのうちに大きな希望を見出すことができるのです。みことばもはっきりとこう述べていました。例えばエペソ１：４－５にこのように記されています。「**1:4 すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。:5 神は、みむねとみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。**」と。またもう一箇所Ｉヨハネ４：１０にもこう書いていました。「**私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。**」これが、神様が示してくださった愛でした。私たちではありません。神様ご自身が示してくださった愛でした。イエス・キリストにあって示してくださった愛でした。そしてその愛を覚えるときに、私たちにふさわしい応答は何でしょう？

もし、まだこのイエス・キリストを通して示された神様の愛を知らないという方がおられるなら、その方にできる応答は、その愛を知って帰ってくださることです。かたくなに神様に逆らい続けて滅びへと突き進むのではなく、罪の赦しを唯一与えることのできるその神様のあわれみを今求めてください。本来であれば罪深い私たち自身が受けるべき罪の罰を、代わりに十字架で受けてくださったそのイエス・キリストを心から自分のものとして求め、自分の救い主として、自分の主として信じ受け入れてください。この方にのみ、何よりも私たちに必要な救いがあります。この神様の愛のうちにのみ、本当の喜びがあります。ですから、どうかそれを知って帰ってください。

また、この神様の偉大な愛を知っていると言われる兄弟姉妹の皆さん、そんな私たちにもできる応答があります。そんな私たちにもふさわしい応答があります。それは、ほかに並ぶもののない、愛に富んでおられ、すべてを支配しておられるその神様に向かって、心から手をたたき、喜びを表すことです。全知の王である最高の主権者に、感謝と喜びをささげることです。それが私たちにできる最高の応答でした。私たちにふさわしい一つ目の応答、それが、心から喜びを表すことでした。

２．真理に満ちてほめ歌を歌うこと　５－１０節

主に対してふさわしい私たちの応答の二つ目は、「真理に満ちてほめ歌を歌うこと」です。もう一度４７篇に戻って続きをよく見ていくと、５節からこのように記されていました。「**:5 神は喜びの叫びの**

中を、【主】は角笛の音の中を、上って行かれた。:6 神にほめ歌を歌え。ほめ歌を歌え。われらの王にほめ歌を歌え。ほめ歌を歌え。:7 まことに神は全地の王。巧みな歌でほめ歌を歌え。」と。皆さん、一つ質問です。詩篇の著者がここで求めていたことを一言で表すと何でしょう？それは、全知の王であるその偉大な神様の前に、私たちがほめ歌を歌うことでした。「**ほめ歌を歌え**」と。

この「**ほめ歌を歌え**」と繰り返されていたことばには、もともと「楽器などを用いながら神様を礼拝したり、そのすばらしさを歌うこと」を表していました。神様を礼拝するのです。そのすばらしさや偉大さ、そういったものに感謝を表しながら歌うのです。賛美するのです。それが、「**ほめ歌を歌**」うということでした。そしてそんなことばを著者はあえてここで５回も繰り返して強調していたのです。全知の王である私たちの神様を礼拝し、そのすばらしさのゆえにほめ歌を歌えと。１回だけではない、２回だけでも３回だけでも４回だけでも５回だけでもないと。いつも、何度でも、絶えず、どんなときも賛美をささげよと。

また気づいたと思いますが、著者はここで、ささげる賛美と感謝の理由を、その人の事情や周りの状況に紐付けてはいませんでした。６節をよく見てみると、彼はただ単に「**神にほめ歌を歌え。**」と言っていました。「**われらの王にほめ歌を歌え。**」とそう言っていました。いろんな理由を挙げてはいません。ただ、人々の目を神様に向けさせていました。ただ、人々の心を神様に留めさせていました。そして、神様を覚えてその神様を中心に礼拝をささげよ、と教えていたのです。もちろん私たちはいろんなことで感謝をささげることができます。私たちがいろんなものを与えられた時に、神様がすばらしいみわざを成してくださった時に、私たちは喜びにあふれて賛美をささげることもできます。でもそれ以上に、神様の存在こそ、私たちにとって賛美をささげるのには十分すぎる理由だということです。私たちが、すべてを支配しておられるその最高の主権者を覚えるなら、ただそれだけでどんなときでも喜びにあふれて絶えずほめ歌をささげる理由を私たちはすでに持っているということです。でも、そのようにして私たちが神様に対してほめ歌をささげようとするときに、もちろんみことばは、私たちの心の伴わない、単なることばだけのくり返しのほめ歌を求めているわけではありません。ましてや、感情だけで中身のないものでもありません。そのささげる礼拝というのは、真理に満ちたものである必要がありました。

２．真理に満ちて誉め歌を歌うこと　５－１０節

ですから、詩篇の著者は７節の最後にこんなことばを付け加えていたのです。そこに鍵となる大切なことばが使われていました。こう書いていますね。「**まことに神は全地の王。巧みな歌でほめ歌を歌え。**」

▶**「巧みな歌」**

ここに「**巧みな歌**」ということばが出てきました。これは非常に興味深いもので、元となることばには「理解する」「慎重に考える」といった意味が含まれています。知恵に関連する意味を持っていることばが使われていたのです。つまり、著者が「**巧みな歌でほめ歌を歌え。**」と言った時、彼が求めていたのは、人々が何も考えずにただなんとなく賛美をささげろ、ほめ歌を歌え、と言わんとしたのではありません。人々が歌う時、歌っている意味を慎重に考えるようにと求めていたのです。ただ自分の感情や気分によって、身を任せて歌うのではありません。神様がどのようなお方なのかに思いを巡らせながら、その揺るがぬ真理に対する応答として、ほめ歌をささげるようにということが問われていたのです。皆さん、バランスが分かりますか？私たちはもちろん手をたたいて神様に喜びの叫びを叫ぶのです。感情を持って賛美をささげるのです。でもそれはただ感情だけではありません。私たちは神様がどのようなお方なのかを考えながら、その神様の偉大な真理を覚えて、それに対する応答としてほめ歌を歌うというわけです。ですから、感情と真理はどちらも大切でした。思い返せばイエス様ご自身も同じようなことをすべての礼拝者に求めておられました。ヨハネ４：２３－２４にこう書いていました。

「**:23 しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのよう**

な人々を礼拝者として求めておられるからです。:24 神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」と。これが礼拝者に求められているふさわしい態度でした。私たちがきょうこの詩篇全体を通して学んできたことは、まさにこの点でした。私たちは何も、自分が思い描く神様に自分勝手な賛美をささげるのではありません。昔も今も、そしてこの先もすべてを支配しておられる主権者であるお方、この方の測り知れない愛を覚えるときに、私たちは自然に手をたたいて喜びの賛美をささげようとするのです。全知の王として君臨しておられるその主に心を留めるときに、その主に思いを巡らせるときに、私たちは感謝して、何度でも絶えず、すばらしい主が私たちとともにいてくださる、すばらしい主がすべてのことを支配していてくださっている、とそうほめ歌をささげようとするのです。だからこそ、神様の偉大さを知ること、それこそが、私たちの心からいつまでもあふれ出すその賛美の源となるのです。この詩篇の著者はそのことをよくわかっていました。だからこそ、こんなことばでこの詩篇を締めくくっていくのです。８－１０節はこう記されていました。「**:8 神は国々を統べ治めておられる。神はその聖なる王座に着いておられる。:9 国々の民の尊き者たちは、アブラハムの神の民として集められた。:10 まことに、地の盾は神のもの。神は大いにあがめられる方。**」最後に不思議なことばが出てきました。１０節に「**地の盾**」と。盾とは何のことでしょう？盾と聞くと、何を思い浮かべるでしょう？

▶**「地の盾」**

この「**地の盾**」というのは比喩的な表現で、盾を持っている人たちの姿を表すものでした。そして盾を持っている人たちの姿をもって、力強い地上にいる戦士たちの姿を比喩的に表していたのです。要するに、すべての国々を治めておられる王である主は、この地上にいる力強い戦士たちですら、完全にご自分の配下において支配しておられるというわけです。まことにそんな力強い者たちも全部「**神のもの**」と。ですから文字どおり、すべてのものがこの方の御手のうちにありました。そしてそれゆえに、すべての神の民は集められ、大いに崇められるべきそのお方に大きな喜びをささげようとするのです。大きな歓声をあげようとするのです。王として君臨されるその主権者なる主に向かって心からのほめ歌をささげようとするのです。

改めて、私たち自身のこの主に対する応答はどのようなものでしょう？みことばが描いていたように、ほかに並ぶもののない、いと高きお方、すべてのものを今もなお思いのままに支配し、望んだことを成し遂げる力と、そして愛にあふれた主。このような主権者なる主を前にして、私たちはどんな態度を示すでしょう？ネブカデネザルのように、これは私が成し遂げた、私の力が知恵がこれを成し遂げたと、誇り高ぶるでしょうか？それともへりくだって、主がすべてのことを成し遂げられた、その主を私はほめたたえると、そのように歩んでいこうとするでしょうか？最初に見たネブカデネザル王も、確かに高慢でした。でも、彼は神様によって砕かれ、その後で、彼は神様をいと高き方としてほめたたえて、賛美をし、心から崇めていました。いつまでも神様は変わらないお方です。私たちが見上げているのも同じ神様です。皆さん、どう応答しますか？私たちにできる応答、それは偉大な主に喜びと賛美をささげ続けることです。そのような者としてともに歩んでいきましょう。